ほんりゅう 尾北

No.261
2020・11
■発　行■
尾北教職員労働組合
■責任者■
小山晃範（楽田小）

新型コロナ感染症対策と学びの保障の両立を

新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休校が終わり、約半年が過ぎようとしています。「検温や消毒作業、三密を避けるなど、毎日続けて大変」「いつになったら通常通りの授業ができるのか…」など、コロナ対策のための負担と、先行きが見えないことに対する不安を感じているのではないでしょうか。

文科省は「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル『学校の新しい生活様式』」（以下、文科省マニュアル）を改訂しました（２０２０・９・３ Ver.4）。これを受け、県教委も「教育活動の実施等に関するガイドライン」（以下、県教委ガイドライン）を更新しました（２０２０・９・15）。

新型コロナウイルスについては、さまざまな見解があり、感染症対策についても各自治体や学校ごとで異なりますが、文科省のマニュアルと県教委のガイドラインを参考に、今後の学校の対応について一緒に考えたいと思います。

学校は低リスクの現状

文科省マニュアルでは、学校が本格的に再開し始めた6月1日から8月31日までの3ヶ月間で、感染者は、児童生徒１１６６人、教職員１９４人と報告されています。児童の感染状況については、「家庭内感染」は75％で、「学校内感染」は15％の１８０人でした。

また年齢別の罹患率では、「10歳未満及び10代では、罹患率が他の年代と比べ低くなっており、これらの年代での発症割合、重症割合ともに小さい」「15歳未満の罹患率が最も高いインフルエンザとは、感染しやすい層の傾向が大きく異なる状況」と分析しています。示された資料では、同年代の重症者割合、死亡率ともに0％です。ただし「本感染症は未だ不明な点も多く、引き続き十分注意する必要がある」と添えています。

つまり、新型コロナウイルスにより、児童生徒も感染する状況ではあるが、軽症や無症状で済んでいることと、未知の部分があるから、引き続き慎重に対応する必要があると、本マニュアルの冒頭で示してあり、今後の対策を考える上で貴重な内容です。

過度な対策にならず冷静に対応を

文科省マニュアルでは、「学校では、『3つの密』を避ける、『人との間隔が十分とれない場合のマスクの着用』及び『手洗いなどの手指衛生』など、基本的な感染対策を継続する『新しい生活様式』を導入するとともに、地域の感染状況を踏まえ、学習内容や活動内容を工夫しながら可能な限り、授業や部活動、各種行事等の教育活動を継続し、子供の健やかな学びを保障していくことが必要」と示しています。

当初、新型コロナウイルスについては不明な点が多く、恐怖心から過剰な対策が取られたところもありました。常時フェイスシールド着用や児童用机の上の衝立などを検討または導入した学校も見られました。

そもそも「3つの密を避ける」とは、3つの密（密閉・密集・密接）が重なる状況を避ける、ということが本来の意味ですが、全てを避けなければならないものと捉え、自主的に対策を強化してしまう状況ではなかったでしょうか。「マスクをしてもしゃべってはダメ」「プリントを1枚ずつ、教師が手渡ししないといけない」という声も聞かれました。

しかし、現在では、新型コロナウイルスについての理解が深まり、文科省等の調査で、学校は低リスクという現状も明らかになってきました。今後は、過度な対策にならず、冷静に対応し、その上で、学校での子どもたちの学びの場を確保していくことが大切だと考えられます。

基本的な感染症対策３つのポイント

感染症対策では、ア「感染源を絶つこと」、イ「感染経路を絶つこと」、ウ「抵抗力を高めること」の3つのポイントを踏まえた取り組みが示されています。

ウの抵抗力を高めることについては、「十分な睡眠」「適度な運動」及び「バランスの取れた食事」を心がけるよう指導することが示されています。小学校の保健体育の教科書でも取り扱う内容で、以前から言われていた基本的な感染症対策です。新型コロナウイルスに限らず、病気にならないためには、自分自身の免疫力をつけるという視点が大切です。

アの感染源を絶つことについては、「発熱等の風邪症状がある場合には登校しない」、「登校時の検温及び健康状態の把握」、「登校時に発熱等の風邪の症状が見られた場合の対応」が示されています。

イの感染経路を絶つことについては、新型コロナウイルスは一般的に、飛沫感染や接触感染で感染するため、「手洗い」「咳エチケット」「清掃・消毒」の3つが大切だと示されています。

改訂ポイント①マスク着用は限定的

新型コロナウイルスに対する知見が深

まるとともに、文科省マニュアルも改訂されてきました。Ver.3（2020・8・6改訂）では、マスクの着用について、これまで、「基本的には常時マスクを着用することが望ましい」と記載されていたのが、「十分な身体的距離が確保できる場合は、マスクの着用は必要ない」と変更されました。

身体的距離については、県教委ガイドラインによると、地域の感染レベル3の場合は2m、レベル1・2の場合は1mとあり、レベル3においてさえも「身体的距離が十分とれないときはマスク着用」となっています。

また、「熱中症への対応を優先し、気温・湿度や暑さ指数が高い日にはマスクを外すこと」、「本人が息苦しいと感じた時などには一時的に自身の判断で外せるよう指導すること」、「体育の授業はマスク着用は必要ない」ということも改めて示されました。

しかし、子どもたちは、マスクをすることが習慣化され、自分からマスクを外すことに躊躇する子もいます。大人や教師が、状況に応じてマスクを外すよう、子どもに促すことが大切になってきます。

改訂ポイント②
消毒は清掃活動の中で

消毒についても、Ver.3以前は、消毒用エタノールや次亜塩素酸ナトリウム消毒液等で、1日に1回以上、児童生徒等がよく手を触れる箇所を拭くよう示されていました。改訂後は、「通常の清掃活動の一環として、…家庭用洗剤等を用いて、児童生徒が行っても差し支えない」「…消毒作業を別途行うことは、…基本的には不要」と緩和されました。

児童生徒の下校後に、教師が消毒作業を行う必要はなく、清掃の時間に、教師や児童生徒が行えばよいのです。また、消毒作業を実施する場合には、「…外部人材の活用や業務委託を行うことによって、各学校における教員の負担軽減を図ることが重要」とも示されています。

尾北では、市町や学校によっては、スクールサポートスタッフ（個人または業者）が学校に入り、消毒や清掃及び印刷等の業務補助を行っているところがあります。

リスクの低い活動から徐々に実施

「新しい生活様式」を踏まえた学校の行動基準では、地域の感染レベル（レベル1～3）を踏まえ、身体的距離が保てない活動や、感染リスクの高い教科活動及び部活動については、各活動の感染リスクの高低を検討し、実施の可否を判断することとなっています。

県教委ガイドラインでは、愛知県の感染レベルは2ですが、身体的距離については、「1mを目安に学級内で最大限の間隔を確保（レベル1・2）」となっています。「1mの距離を確保できない場合には、換気を十分に行うことや、マスクを着用することなどを併せて行う」とあり、ここでも身体的距離がとれればマスクは必要ないとなっています。

学習活動については、「感染拡大局面では、『感染リスクの高い学習活動及び特に感染リスクの高い学習活動は行わない』」、とありますが、「感染収束局面及び感染拡大局面から概ね3週間経過後については、『感染症対策を行った上で、再開を慎重に検討する』」としています。

ちなみに、レベル1については、「感染対策を行った上で、通常どおり実施する」とあります。

後述の「感染リスクの高い活動」が行えない状況は、レベル3および感染拡大局面のみであり、現在の愛知県の感染レベル2であれば「慎重に検討する」段階にあると言えます。

取り得る対策で活動を再開

各教科における感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い学習活動としては次のとおりです。

◆感染リスクの高い学習活動

①児童生徒が長時間、近距離で対面形式となるグループワーク等

②理科…「児童生徒同士が近距離で活動する実験や観察」

③図画工作・美術・工芸…「児童生徒同士が近距離で活動する共同制作等の表現や鑑賞の活動」

◆特に感染リスクの高い学習活動

①近距離で一斉に大きな声で話す活動

②音楽…「室内で児童生徒が近距離で行う合唱、リコーダーや鍵盤ハーモニカ等の演奏」

③家庭・技術家庭…「児童生徒同士が近距離で活動する調理実習」

④体育・保健体育…「児童生徒が密集する運動」「近距離で組み合ったり接触したりする運動」

前述のように、これらのリスクが高い活動は、現状では、「慎重に検討」段階にあります。それゆえ、例えば、「長時間」ではなく「短時間」で、「近距離」ではなく「適切な距離をとって」、「大声」にはマスクを着用して、といった対応が考えられます。また、各学校で現在行っている手洗いや換気などの感染症対策を前提に、リスクの高い活動でも、工夫次第で実施可能とも考えられます。

尾北の小中学校では、児童生徒の学習を保障するため、これまで後回しにしてきた学習活動を再開しているところもあります。

学校における感染は、低リスクの現状です。感染そのものや、起こりうる誹謗中傷を恐れて、子どもの学びを削ってよいのでしょうか。子どもが学校で楽しく有意義に学習できるよう、感染レベルを見ながら「感染症対策を行った上で実施」「リスクの低い活動から徐々に実施」を検討する時期にきているのではないでしょうか。

そして、一人一人の子どもに寄り添い、豊かな学びを保障するためには、やはり、少人数学級の実現が必要です。今回、新型コロナ対策で、学級分割による20人以下の少人数授業を全国の多くの教員が体験し、その意義や必要性が再認識され、「今こそ少人数学級を！」の声が大きく広がっています。真に必要な改革や改善を進めていきたいものです。